

氏名（本籍）	坂井直樹（群馬県）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第113号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位論文等題目	作品考・炉 論文考・炉 香炉制作を通じての考察
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 宮田亮平
（論文第1副査）	” ” （ ” ） 佐藤道信
（作品第1副査）	” ” （ ” ） 戸津圭之介
（副査）	” ” （ ” ） 堀口光彦
（ ” ）	” 助教授 （ ” ） 篠原行雄

（論文内容の要旨）

私は常に作品に、自然界の植物から得た感動を表現することを目的としてきた。

幼い頃に自然と戯れた経験は、今の私にとって原風景となり、記憶のなかに組み込まれている。四季折々に変化する自然のドラマを楽しみ、様々な体験をしてきた。自然がとても身近で、豊富に存在している環境に育った。

私が生まれ育った故郷には、たくさんの樹木に囲まれた利根川の大きな流れが広がっており、その大きな自然が、私の幼い頃の遊び場であった。

林の中でかくれんぼや木の実拾いをし、秘密の基地を作った。河原に出掛けては、岸辺の小さな流木を拾い集めて大切に持ち帰った。ドングリも流木も、虫食いの枯れ葉さえもが、大切な宝物として、小さな空き箱に並べられた。

季節ごとに表情を変え、様々な宝物を与えてくれる自然の素晴らしさ、大きさ、遅しさ、それらのすべてが私を夢中にさせた。

あの頃、自然から得た感動、自然の中で過ごした時間は、私にとっても大きな影響を与えてくれた。あの大きさ、温かさ、毎日新しい発見を与えてくれる樹木のおおらかな姿。自然の伸びやかな枝振りは、私の求める形態として、自ずと制作のテーマとなっていく。

自然界の植物をモチーフとし、発想の手がかりとした制作スタイルは、卒業、修了制作を経て、現在の制作テーマである「香炉」へと変化した。

本論文は、その現在の香炉制作に至るまでの様々な考察を、作品の解説とともに以下の展開で考察した。

第一章では鍛金の視点から見た、金工の歴史と過去の自己作品の制作に至るまでの考察を述べ、卒業制作、修了制作の作品解説を述べた。

第二章では次なる展開と称し、香炉制作に展開するまでの経緯、自然界から得た発見や様々な考察を述べた。

第三章では「香」から「考」と称し、香りが持つ機能、特性から香についての歴史、過去から現代にかけての香炉の解説を写真とともに述べた。また、生活における工芸の価値を「美・生活・用」としてまとめ、考察した。

第四章では提出作品である「考・炉」を写真とともに解説した。

終章では、「考・炉」を使う上で重要な、「手、道具、芸術、精神」についてまとめ、「手」で使うことの価値や精神、芸術性について考察した。提出作品である「考・炉」は、使う人が実際に手で蓋を開ける。手で香をセットする。そして自ら火を灯す。その一連の動作のなかでの、「手で触れる」ということにポイントを置き考察し「考・炉」が持つ機能を様々な角度から分析し、今後の制作の展開と絡ませ結びとした。